１　年　団

学年主任：　関　直樹

（１）今年度の目標

①高校生としての自覚と責任を持ち、基本的生活習慣を確立する。

・自律的な生活を心がけ、社会的なマナーを身につけ、良識ある高校生であることを目指す。

②授業を中心に据えた自主的学習習慣をつける。

・家庭学習時間（最低３時間）を確保し、計画性のある学習ができるようにする。

③目標を高く持ち、充実感と達成感の得られる高校生活にする。

・学級活動、部活動、学校行事、生徒会活動等に積極的に参加し、協調性や社会性を養う。

（２）主な取り組みの計画

①学校ベースの生活習慣、学習習慣を確立させる。

・入学当初のオリエンテーションで、丸亀高校の歴史、望まれる生徒像、教育課程、校則などを伝える。

・集会、ホームルームなどの時間に、集団の中の自分を自覚させ、団体行動における責任ある行動・マナーを習慣化させる。

・面接で、生活時間調査等で自分の生活を振り返らせ、目標を高く持ち、時間を有効に使わせる工夫・意識を持たせる。

②講演会や大学訪問を通して、自分の将来像を考えさせる。

・総合的な学習の時間（テーマプロジェクト：ＴＰ）の各講演会や、職業研究・学部学科調べ等を充実させ、進路意識を明確にさせる。

・大学のオープンキャンパスや大学訪問を通して、実際に大学生活を経験させる。

③様々なことに興味を持たせ、積極的に学校行事や部活動に参加させる。

・部活動に積極的に参加させ、身体を鍛えるとともに、仲間との連帯意識を育てる。

・運動会や津島杯、斯文祭などを通して、クラスの一体感を盛り上げさせる。

（３）成　果

①　高校生としての自覚・生活習慣・学習習慣に関して

・家庭学習時間は、学年プラス２時間を目標に取り組ませた。生活時間調査では1日平均４月（3.2時間）、６月（3.5時間）、９月（2.8時間）、１１月（3.2時間）とほぼ目標とした時間の確保ができている。

・新入生オリエンテーションでは、各教科９０分（国・数・英）の教科指導などに加え、セルフマネジメントについての時間を設定し、全員に持たせたシステム手帳を使い、計画を立てることで時間の有効活用の重要性を意識させた。朝、登校後に教室で学習に励む生徒の姿が見られた。

②　目標や将来像を持たせることに関して

・高い目標を持つ生徒が多く、生徒への案内を積極的に行うことで、昨年度に引き続き東大・京大のキャンパスツアーや阪大研究室体験に多くの生徒が積極的に参加した。（東大38名、京大41名、阪大13名）

・総合的な学習の時間での職業講演会では語学・国際関係の講座を加えて８講座とした。生徒の選択肢を広げることで、生徒に興味関心を持っている進路や職業について考えさせることができた。

・大学訪問を香川大学（経・法・教・医(医・看護)・工・農）と徳島大学（総科・工・歯・薬・医(栄養・保健)）と昨年度より訪問する学部を増やし、生徒の選択肢を増やした。それぞれの希望した学部の説明や模擬授業を受けたり、本校卒業生の話をきくなどして各大学の雰囲気を実際に体感し、進路意識を高めることができた。
・発展学習セミナーを開催し、難関大学及び医学部を志望する生徒を対象に、本校職員に加え英語の外部講師や卒業生を招いて、数国英の授業や勉強法及び難関大学の入試情報などに関する講座を実施した。(3月5日･6日に実施予定)

③　様々なことに興味を持たせ、充実感と達成感を得させることに関して
・学校外での活動（各種ボランティア、科学オリンピックなど）にも積極的な呼びかけをすることで活動に参加し、「科学の甲子園」では県代表となり、全国大会への出場を果たすことができた。
・昨年度より若干減少したが、新入生オリエンテーションの先輩からの話や生徒会主催の部活紹介により、約８割の生徒が部活動又は生徒会活動に参加し、意欲的に活動している。
・運動会、津島杯、斯文祭等の行事では、生徒どうしが協力して活動することができ、斯文祭では校内展示の部で３組が第１位の成績を収めた。また、津島杯でも種目別競技（卓球）で１位となるなど良い雰囲気が生まれた。

（４）課題と次年度以降の改善策
・１年は年度当初から行事が大変多く、教員・生徒ともに慌ただしい。どれも生徒のためになるものだが、もう少しゆとりある計画が立てられると良い。総合的な学習の時間とホームルームでの内容（現代的課題のレポートとディベート）については２学期に集中しており、バランスを考えると来年度は全て１年次でやろうとせず、どちらかを２年次に回すなどして､一つ一つの取り組みに時間をかけるほうが良い。
・大学訪問は生徒にとって進路を考える上で効果が高いので、是非継続していく必要がある。本校の行事日程や受け入れ大学にも条件があり難しいと思われるが、今年度は実施できなかった文学部や国際関係学部など一部の学部については、ＳＧＨも視野に入れて四国外の大学まで範囲を広げて考えていく必要があると考える｡また、長期休業を利用するなどして、自分の志望している大学のオープンキャンパスにも積極的に参加を促していく。
・システム手帳を使用することでメモを取る、計画を立てて行動できるなどの生活習慣が確立されたように感じる生徒もいるが、使用しておらず生活習慣が確立されていない生徒も見られる。継続的な指導については不十分ない部分もあったと考えられるので、次年度もいろいろな場面でこまめな指導を行う。
・学習意欲の高い生徒が多いので、２年次で中だるみが起こらないように、十分な情報共有を行い、２年次のクラス編成を考えるとともに、２年次ではいろいろな機会をとらえ、自己の目標、取り組むべき課題、実行の有無を粘り強く再確認させる。また、学習時間を４月と１１月を比較すると、平均４時間以上（21.6%→21.3%）とあまり変化はないが、２時間未満（12.3%→23.6%）と増えており、学習習慣の確立が十分できていない生徒も見られるので、新学期を迎える前に指導するとともに、２年スタートからも継続的な指導を続ける。
・入学後、不安を抱えながら高校生活を送っている生徒がいることを認識した上で、日々の授業や生徒観察や面接、保護者との連絡を密に取り合うことなどを通して生徒の状況把握に努める。